

# 絶対信仰・絶対愛・絶対服従の核

(1999年10月8日)

きょうは何日ですか？ 十月八日です。今、先生が皆さんと記憶しておかなければならないことが一つあります。それは、なぜ私が南米を重視するかということです。それは時間さえあれば南米に心をはせて、そこにすべてを結びつけようとする心は、すべてを最終的に精算できる神様の心であるということを知っているからです。ジャルジンに「祝福家庭世界平和統一教育本部」があります、教育本部。天国に入っていける最後の手続きを踏める足場となるので、そこにすべて精誠を尽くさなければなりません。

そこを中心にいかに四か国を連結するかといえば、青少年を中心にそのような運動をして、全般的に教育を施すのです。ですから、精誠の限りを尽くさなければならぬことを皆さんは知らなければなりません。

先生は時間さえあれば、南米に向かいますが、それは南米が好きで行くものではありません。み旨のすべての決定を.....完全にきれいにするには、避けようのないことなので、南米のすべてに関心を抱いているのです。今、ここもそうではありませんか？ ワシントンでは二日後に、「超宗派超国家連合」、「超大学連盟」に属する世界の最高位の人たちを招いて教育する、訓読会セミナーがあります。それを二日後に控えているというのに、なぜ南米に行かなければならないのでしょうか？

摂理的なみ旨から見て、今、世界を収拾し得る世界最高の首脳を集めて整理作業をする、この時に及んで、なぜ南米に行くのでしょうか？ すべては、南米に行って根に栄養を与えなければならぬからです。根を通じて芽が栄養を受け、枝が栄養を受け、幹が栄養を受けます。生きとし生けるものは、根を通して芽と枝と幹が連結するのです。

今、我々が韓国から始めて根を下ろしたのが、現在のジャルジンと南米四か国なので、その四か国を連結して帰ってこそ韓国が、すべて芽が育つのです。芽が、中心の根から、中心の幹から、中心の芽と一つになって、これが授受してこそ、すべて四肢四方に広がるのです。そうしてこそ枝が、枝の芽がそれに応じて育つのです。そのような因縁があるので、南米を重視するのです。

お母様は、時間があればこのイーストガーデンで息子や娘と一緒にいることを望みます。それは当然です。そのように願わない父母がどこにいらっしゃるのでしょうか？ しかし、そ

の家庭というのが、天の国における最高の勝利基盤を中心として、根や幹、枝、芽まで、すべての反対要素を浄化し……その日になれば、その日全体が、生命の根から、幹、枝、芽の全体まで、生命の環境的な要件にならなければならないのです。それがなされなければ、ある分野において治療を受けるべき立場が残るので、サタン家庭を中心とした、背後にある家庭よりも、それをまず中心としなければならないのが、先生の行く道なのです。

統一教会の信仰が困難なわけではありません。統一教会の蕩滅の道というものは、みな解消されています。蕩滅の道を解消させたその中心が真の父母と神様の愛なので、いかにしてその真の父母と神様の愛に一体となるのか？ 遊びごとではありません。絶対信仰です、絶対信仰。サタンがこれまで信仰できず、アダムとエバが父の前に絶対信仰できませんでした。私たちの息子、娘も今後は問題です。父母に対して絶対信仰を持たなければなりません。また、絶対信仰できないで墮落した世界を收拾するには、神様と真の父母になれる基準を絶対信仰することによって、すべて除去できるのです。

ですから、「ジャルジン宣言」の第一条が何ですか？ 絶対信仰、絶対愛、絶対服従を宣言したのです。中心がそこで連結されたことによって、その場を、夜も昼もどんなときも先生が忘れてはならないのです。そのような信仰をもって祈禱し、そのような内容をもって信じて活動できる場においては、常にサタン世界が譲歩しなければなりません。

絶対信仰はどのような道を行くのでしょうか？ 父と子が真の愛を中心として一つになった、父子関係の因縁を中心とした勝利の覇権の主体が神様であり、勝利の覇権の主体的な対象が真の父母なので、その信仰の基準を中心として一つになったその基準は、サタン世界がいかに大きくて、いかに歴史的な災いや蕩滅を立てても、そのすき間の世界、一つになった世界のすき間には入り込めません。

存在の権限が、いかなる信仰、いかなるサタン世界をもってしても、そこにはまったく入り込んでいける場がないというのです。ですから、絶対信仰をもって神様が創造されたのです。その創造されたあらゆる被造物の中には、信仰を中心としたすき間に入り込むことができず、絶対愛を完成したので、絶対愛の間に、いかなる存在も入り込むことができず、絶対服従したので、たとえ神様がおられないとしても、絶対服従し得るアダムの心……、その主人の立場にはいかなる者も立てないのです。サタンにいかなる権勢があっても、絶対服従するその立場を治め得る能力はないのです。これが三大要件で

す。

きょうは十月の最後の日なので、きれいに整理してください。真の父母を信じるのは大変です。神様を信じるのは大変です。しかし、自らにおいて絶対信仰、絶対愛、絶対服従できる立場に立てば、それがイエス様の行く道であり、イエス様が守られる絶対信仰であり、イエス様が愛した絶対愛であり、イエス様が生きていく絶対服従の道だったという事実を知らなければなりません。同じように先生においては、神様とイエス様の絶対信仰の道をそのまま伝授して歩んでいくのです。

その愛の道、その服従の道を行く間、サタンは永遠に陰の立場に入れません。陰の立場に入れないというのは、つまり、二十四時間のうち正午を中心として、日光によって陰がなくなるのです。それが夕方になれば生じ、朝になれば生じても、十二時にはなくなるように、その正午の立場に入っていけるのです。

絶対信仰は、昼で言えば陰がないことを意味し、絶対愛も、サタン世界には愛の種類が多いですが、陰りのない愛を意味するのです。絶対順応とか何とか、法によってすべて従っていくとしても、絶対服従の立場に入っていかなければなりません。神様とイエス様、真の父母とイエス様と神様が連結されたその場には、絶対信仰、絶対愛、絶対服従だけが定着して、支配できるのであり、それ以外のものはなくなってしまうのです。

絶対信仰には、個人的な信仰、家庭的な信仰、氏族的な信仰、民族的な信仰、国家的な信仰などがすべて入っており、絶対愛には、個人的な愛、家庭的な愛、氏族的な愛などがすべて入っているのです。服従もそうです。孝子の道理は、父母の前に絶対服従しなければならず、忠臣の道理は、君主の前に服従しなければならないのです。このすべてが天理となっています。ですから、ジャルジンに行って、先生が立てたのは絶対信仰です。誰を中心として？ 神様を中心として絶対信仰するのです。アダムはできませんでした。サタンもできませんでした。イエス様が絶対信仰したので、アダムはイエス様の前に服従して、愛さなければならないという論理が出てくるのです。

その原則的な基盤が、私たち統一教会の真の父母と神様の間に立てられたのです。こうした関係に連結された一体理想を立てた立場に立っているので、地上に平面的な場で何よりも貴く、世界をあげても換えられないのです。自分たちが信じる王とか何、どこかの国の大統領になっても、サタン世界の何物とも換えることができません。サタン世界の何物も信仰の対象になり得ないということです。父や母、妻、金、知識なども、すべて否定するのです。

それでは、絶対信仰の願うのは何かというと、絶対愛の道を探していくことです。絶対愛のためにやれというのです、絶対愛のために。アダムとエバが神様を絶対信仰できず、絶対愛を成就できなかったのです。ですから、こうした失われたすべてのものを探して埋め、未完成の環境圏内にサタンが寓居するすべての寓居地を、完全に絶対信仰の上で絶対愛が連結されれば、すべて取り払ってしまうのです。

その愛の前では、絶対的な夫は絶対的な妻に服従し、絶対的な婦人は夫の前に絶対服従して、その夫婦は神様、お父様の本然的な愛の前に絶対服従しなければならないのです。これは愛を中心としたみ言です。これ以上、サタンが存在し得ないということです。

それでは皆さんがそうですか？ 真の父母が「目をくりぬけ！」と命ずればどうしますか？ 自分自身をすべて否定しなければなりません。否定しないことには、墮落性本性を解消できないということを知らなければなりません。絶対否定しなければならないのです。「目をくりぬけ」と言えば、どうしなければなりませんか？ 「わあっ、痛くてできません」。そうではありません。「鼻を切れ！」問題ではありません。「口を縫ってしまえ！」、「耳をふさげ！」、「我が身を犠牲にせよ！」、それが問題ではないのです。

一番問題が「生殖器を焼いてしまえ！」ということです。それが永遠にその一族が血を、血の痕跡をなくす立場ならばどうしますか？ 目をくりぬきますか、生殖器を焼きますか？ こうなるのです。鼻を切りますか、生殖器を焼きますか？ 口を縫いつけますか、生殖器を焼きますか？ 耳をふさぎますか、生殖器を焼きますか？ 自分の命を犠牲にしますか、生殖器を焼きますか？ 生殖器を焼いてはいけません。神様が製造された主流思想がそこに連結されており、父母がその愛の歴史を通じて、家庭と世界を創造しようとする立場にあるので、生殖器を焼くことはできないのです。

「生殖器を焼け」というのはどうしてかということ、墮落したからです。墮落したので、そこまでも服従しなければならないのです。そのような基準を抱く場において、絶対信仰、絶対愛、絶対服従という論理を掲げたということを知らなければなりません。そのような信仰を持つようになれば、サタンが永滅します。個人的なサタン、反対し迫害して蕩滅させたすべて、神様の心情に釘を刺したすべてが、一度にみな逃げていくのです。

そこに誰か聖人の訓示が必要なく、聖人の道理の行跡が必要ないということです。国家の忠臣、宇宙の聖子の道理を教えてあげましたが、その信仰基準に入っていけば、すべてのものが完成するのです。個人完成、家庭完成、氏族完成、民族完成、国家完成、世界完成、宇宙完成、神様の愛の理想がすべて完成できるという、そのような基盤が、創

造の出発から始まったのです。神様の絶対信仰、絶対愛、絶対服従の原理によって創造したのです。神様も愛の前には絶対服従されるのです。

そのような原則に一致するためのものが、私たちの課業の終着点なので、ジャルジンに行ってこのような宣布をしたわけです。サタンであれ、誰であれ、天下の誰であっても、ここに入り込むことができないのです。

このような観点から見て、きょう、ここで全体・全般・全能の役事をするのです。全体を代表した全般、すべてが統一されているのです。全権、すべてのサタンの権限を中心として、不可能のない全般全能の時代を越えて立ったので、今や私たちの願いが何かというと、神様の愛の相対になったのです。また、真の父母の愛の相対となったので、「お父様！ 最後の決断を下してください」と祈らなければならない祈禱時代に入っていくのです。

ですから、私に願いがあれば、願うことのできる時代、「私がこうしたことをしていますので、その願いを成就させてください！」、「ここで全体の平準化水平世界を築いてください！」と祈れるのです。神様の息子として、神様との父子関係の因縁を中心に、家庭を中心とした基盤に立っているのです。そこにおいてすべてが成就するのです。今や、全体、全般、全権、全能の、信じて歩む絶対信仰、絶対愛、絶対服従するこの道理に、愛の主体圏の前に相対圏として一つになった基準、前後の核の愛の中心に、花のような立場に立っているのです。そこに否定的な糞ふんの匂いが広がったならば、「その臭いにおが花の香りを消さないように防いでください！」と祈禱する時が来たのです。台風が吹いてきて、その香りの園がすべて損なわれそうになったときには、「防いでください！」と祈る時が来たのです。

そのために絶対何ですか？ 絶対信仰です。自分の五官全体は無視しても、血筋だけは否定できません。それを知らなければなりません。五官は燃やしてしまっても、生殖器は燃やせないのです。血筋だけが永遠なる神様の国と永世でき、永遠なる歴史と永世できる主流なので、それに反することはできないのです。

ですから、絶対信仰で守って、絶対愛の主体、もしくは対象として保護して、絶対服従することによって、愛の道を服従できる生殖器にならなければならないのです。生殖器は私たちに訴えかけるのです。「墮落した世界を否定できるものが私にあるから、私に絶対服従してください！」と言うのです。

そのようにしてこそ、神様が創造された主体的な理想の前に、対象的な価値として登

場し、そこで一つになることによって、天上天下に父子関係の因縁を中心として所有権が自由に移転でき、その移転されたものをいつでも元に戻せる……いつでも受けられる解放世界へと越えていくのです。アーメン！

善悪の実とは何ですか？ エバの生殖器です。すべて男性の生殖器が誘惑することができ、女性の生殖器が誘惑するのです。それでエデンの園とは何でしょうか？ エデンの園が何か分かりますか？ 男性と女性の二人が一つになった愛の体を意味します。一体となった園を指すのです。そこで生きなければならないのです。

生殖器と絶対信仰、絶対愛、絶対服従の基準に立ったそこで生活してこそ、神様の永遠なる所有権となるのです！ きょうがジャルジンに向かう十月八日なので、あらゆる勝利の盾の基盤の上で結論づけるのです。皆さんがすべて目をくりぬき、五官をすべて抜いてしまっても、この生殖器の道理を守らなければならないのです。

絶対信仰、絶対愛、絶対服従！ 言葉だけではありません！ そのためには、目をくりぬき、五官を否定しても、私たちが残すべきものは、生殖器の愛の天理なのです。それによって、みな終わるのです。

ですから、父子関係の愛、夫婦関係の愛は、絶対信仰、絶対愛、絶対服従の道理を立てる道です。その盾の、すべてのハンマーが何かというと、生殖器なのです。そうすれば、みな終わるのです。それ以上はありません。

ですから、皆さんが生殖器を崇拜せよというのです。「絶対愛の主人であり、絶対信仰の主体であり、絶対服従の主体であり、神聖なるそのような主体となりましたから、神聖なる道を永遠に千年、万年、神様を中心として愛の一体の道を歩んでください」と祈禱せよというのです。

このようにして、これからは自分の名前で「祈禱いたします」と言えば、成就するのです。その上で私の名前で、「真の父母の勝利圏を祝福で受け継いだ祝福家庭、某が祈禱いたします」と言えば、すべて成就するのです。ここで血筋が重要なのです。血筋がそのままなされるのではありません。男性と女性が合徳する場です。これがすべての結論だったわけです。

目もそれを願います、目も。目玉が何を願いますか？ 絶対信仰、絶対愛、絶対服従です。そして五官全体が何を願いますか？ 愛を中心とした器官の前に私たちは犠牲となっても、その生殖器だけは犠牲にしないで残すのです。天理の道理を受け継いで私の体のすべてが不自由になっても、五官をなくして不自由になっても、「今後、私が死ん

でも、生まれる息子と娘は不自由にはならないので、それが解放であり、願いである！」  
と言えなければなりません。墮落した後孫は、そのような希望の日のために生き、生を終えなければならぬのです。

恐ろしい結論です。絶対信仰とは何ですか？ 漠然としているではないですか。絶対愛というのが漠然としていました。絶対服従というのが漠然としていました。愛の道の前にはすべてを否定すべきでしょうか？ 愛するときは、すべてのものを否定しなければなりません。世の中の万事、すべてを否定するのです。唯一自分の妻しかいないと思って、絶対視しなければなりません。そのようなときは、父や母を考えながら愛してはいけません。息子や娘を考えながら愛してはいけません。その妻だけを絶対信仰、絶対愛、絶対服従するのです。お互いがそうしなければなりません。神様を迎えることのできるくぼみや膨らみにならなければならないのです。神様が膨らみならば、神様を迎えることのできる母、夫婦がすべてくぼみになって、一つになるのです。

先生がこうした結論を下すことを夢にも思わなかったでしょう？ 気を引き締めなければいけません。先生は、いいかげんにやってなった先生ではありません。徹頭徹尾、この道を備えるために、穴が開けばそれを埋め.....いろんなことをみなやったのです。そんな先生をそのように絶対信仰、絶対愛、絶対服従しなければなりません。自分の一身で何よりも貴い愛の五官、宇宙を総合できるその器官よりも、さらに愛し、さらに尽くし、さらに服従し、さらに信仰しなければなりません。そうすればすべて終わるので

す。ですから、結婚したいならば、成熟して入っていききたいならば、誰を中心として考えるべきかという、自分の妻を考える前に父や母を考えなければなりません。これが<sup>ようてい</sup>要諦です。父と母に「自分がこのように相続して成人になったので、結婚しなければなりません」とお願いするのです。そうしてこそ、絶対信仰の基準が定まり、絶対愛の基準が定まり、絶対服従の天理の道理が相続されていくのです。

こうした真理を知る者が自分勝手に結婚できますか？ 自分勝手にそれを引っ張っていけるかというのです。皆さんが真の父母を考えると、真の父母はむやみに生きる人ではありません。どれほど気のふさがる生活をしたか知るべきです。道なき道を行き、いばらの根をすべて切って歩み、違法なる愛の根を抜いておいて越えてきたという事実を知らなければならないのです。

毎日のように考えなさい！ 絶対信仰、絶対愛、絶対服従！ 私の体の五官を犠牲に

してでも残すべき、そのような愛の天理を保護すべき私自身であるとわきまえるのです。そのような人々が、どうして皆、横道にそれることができますか？

先生は恐ろしい人です。複雑な環境をすべて経ながら、最後のこの終点をみな払いのけて乗り越えるとき、感謝できる自らを発見できなければ、地上世界が天国と化す道がありません。それを自己主管できなければそうなるのです。

ですから、「宇宙主管を願う前に自我主管完成しよう！」というのが真理です。「絶対信仰をもって、絶対愛をもって、絶対服従の心をもって、私一身のすべてを、それ自体までも否定して乗り越えなければ、神様をすべて私のものとして、私の愛を全体化できる、神様を支えて抱くことのできる私自体にはなれないというのが天理である」と考えてこられたのが、真の父母の歩まれた道であるということを知らなければなりません。

今回行くのが、南米の最後の旅行となるかもしれません。今、すべてが超教派大会を控えています。私がどれほどその大会を願ってきたことでしょうか。それを捨てて、どうして私が南米に来ましたか？ 今、私が内的に祈祷してきたのは、「お父様、私がこれまで<sup>ひっばく</sup>逼迫して反対した者たちを愛するのに、誰よりも自分の父母よりも、自分たちの王よりも、また自分たちの兄弟よりも愛してきたので、今は彼らがすべて天を代身して愛することのできる時代に帰らなければなりません。大転換を起こさなければなりません。そこに背く者が国に行けば、国が壊れても、世界が壊れてもひっくり返さなければなりません」という内容です。このような決定的な祈祷をする時が来たのです。